

JA全農ウィークリー
WEEKLY

5
|
7
面

全農技術顧問 堀江武氏インタビュー アジアを支える水田農業のこれから

3面

「香港フードエキスポ2018」に出展



「香港フードエキスポ2018」で一般来場者
向けに出展商品をPR(3面)



山梨県産ブドウのトップセールスで「シャインマスカット」を配布してPRする後藤斎県知事に(2面)



地球温暖化で水稲の高温不稔(ふねん)克服の技術開発が課題と語る堀江氏(5-7面)

- ## 2 農産物パレット推進協議会がスタート (園芸部)

東京・大田市場で県産ブドウトップセールス
(山梨県本部)

- #### 4 全農リポート2018発行(広報部)

- ## 8 自動飛行型ドローンで実演会 (新潟県本部、山形県本部)

- 9 JAズームイン(JA茨城むつみ)

- 10 県本部だより(岩手県本部)

- ## 11 青果情勢(園芸部)

- 12 JA東京アグリパークでJAの魅力PRを
(東京都本部)

JAタウンショップ紹介

和歌山発!! ふるさとの便り
(JA和歌山県農)

**Web版JA全農ウィークリーは
こちらから**



<https://www.zennoh-weekly.jp/>

News!

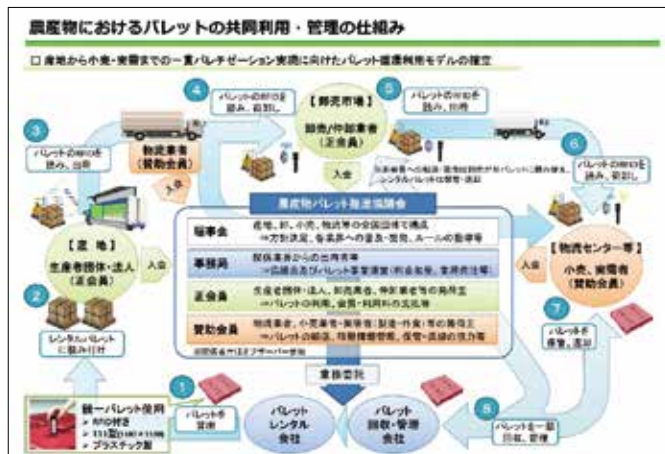


一般社団法人農産物パレット推進協議会がスタート

農産物輸送にレンタルパレットを普及・循環させる新モデル構築目指す

園芸部

同協議会は8月1日に発足し、全農のほか東京青果などの卸売市場や、レンタルパレット会社、運送業者、小売業者などの関連業界団体から広く会員を募り、農産物流通に従事するトラックドライバーの荷待ち、荷降ろし作業時間を、2020年度末までに3割削減することを目標に掲げています。使用するプラスチックパレットのサイズを統一し、Cタグ(RFID)を付け、物流の各段階で読み取ることによって紛失や流用を防止します。11月から正式に会員を募り、2019年1月からの本格普及を目指しています。全農



はこの取り組みを通じ、①トラックドライバーの確保②輸送費上昇圧力の抑制——を図っていきたくと考えていますので、JA・県JA・県連の幅広い参画・協力をお願いします。

全農は、農水省・経産省・国交省でつくる農産品物流対策関係省庁連絡協議会の議論を踏まえ設立された一般社団法人農産物パレット推進協議会に参画します。同協議会は農産物流通に関して、生産地から消費地までをプラスチックパレットで配送することで、トラックドライバーの負担を軽減し、物流費の抑制などを図るものです。

News!



東京・大田市場で県産ブドウのトップセールス

立川の駅ビルで消費者にもPR

山梨県本部



大田市場で山梨県産ブドウをセールスする後藤県知事、関本会長ら

その後、都内のホテルで京浜関東主要市場との「山梨県青果物意見交換会」を開きました。小池通義副会長が情勢報告し、市場側と産地側との活発な意見交換が行われました。

続いて「九州屋ルミネ立川店を訪れ、一般消費者に向け、人気の「シャインマスカット」を先着100人に無料配布しました。

当日早朝、大田市場の東京青果せり場に県産の「シャインマスカット」「ピオーネ」「ゴルビー」の展示と試食コーナーを設け、後藤知事、山梨県知事、関本会長らと共に山梨フルーツレディーが笑顔で大勢の市場関係者に県産

ブドウのおいしさをPRしました。試食した市場関係者からは「どの品種も甘みが強く、とてもおいしい」などの声が聞かれ、高評価を得ました。

試食に続き、市場関係者に県産ブドウの販路拡大に向けての協力を要請しました。

山梨県本部は8月25日、山梨県農畜産物販売強化対策協議会（関本得郎会長）と連携し、東京都中央卸売市場大田市場、九州屋ルミネ立川店などで県産ブドウの消費拡大・販売促進活動を図るため「トップセールス」、「山梨県青果物意見交換会」を開きました。

「香港フードエキスポ2018」に出展

香港最大級の食品展示会で国産農畜産物・加工品をPR

全農グループは8月16～18日、香港最大級の食品展示会で、20カ国・地域から企業や団体が出展する「香港フードエキスポ2018」に出展し、50万人を超える来場者へ国産農畜

産物や加工品の試食販売、商談とテストマーケティングを行いました。

【輸出対策部・全農インターナショナル香港(株)】



香港最大のECサイトに全農専用ページを開設

展示会では、全農ブランド「お米のミルク」のほか、グループ会社の商品の黒酢ドリンクやサラダチキンなど香港への輸出可能性を見極めるため、国産農畜産物や加工品約50品目を香港バイヤーに手にとりいただき商談を行いました。バイヤーの皆さんには、今まで香港で見たことのないJA商品に興味を持っていたことができました。商談を継続し、輸出拡大につながるよう取り組みます。

また、ブースに設置したモニターでは商品紹介だけでなく、ぜひサイトをのぞいてみてください



また、ブースに設置したモニターでは商品紹介だけでなく、ぜひサイトをのぞいてみてください



香港政財界のガラディナー（VIP晩餐（ばんさん）会）で全農提供商品を説明する全農インターナショナル(株)の川崎浩之社長

なお、展示会最終日には、一般来場者向けに岡山県産桃、お米のミルクを中心に即売会を実施し、テストマーケティングを行いました。即売会に合わせ香港最大のECサイトであるHKTVmallに全農専用ページを開設し、リピート購入につながるよう仕掛けをしています。ぜひ、のぞいてみてください。



フードエキスポ最終日には即売会を開き売れ筋を見極めました



香港最大手ECストアHKTVmallで販売を始めた「お米のミルク」

『全農リポート2018』を発行

全農は9月7日、事業概要や自己改革の取り組み、組織の仕組みなどを紹介する冊子「全農リポート」の2018年版を発行しました。関係先や全役職員に配布し、取引先、メディアへのプレゼン、内部での勉強会などで活用していきます。【広報部】

組織の目的や仕組み

全農は協同組合組織です。株式会社などとは異なり長期的な視野に立つて出資者（組合員、準組合員）や消費者の暮らしを皆で助け合いながら守り向上させることを目的としています。そうした協同組合の原則・歴史解説や識者の見解などを掲載しています。

自己改革の進捗状況

利用結集という協同組合の原点に立ち返り、現在の激変する経済・社会情勢を踏まえた自己改革実践の現状と方向性、販売部門の直接販売や買取販売の強化、生産資材の新たな共同購入などを紹介しています。

各部門の事業概要

多岐にわたる全農の事業を部門ごとに紹介しています。購買・販売（輸出も含む）の各部門や、広報活動、全国のレストラン、ショップについての概要などを解

自己改革の進捗状況などを紹介

説。主な全農グループ会社の紹介も紙面を増やし紹介しています。

県本部の取り組み紹介

各県本部の特色ある取り組みを、記事だけでなくQRコードを用いた動画を組み込んで紹介しています。

トピックス

最近のトピックスとして、オープンイノベーション（他企業との資本・業務提携）やJAと取り組むトータルコスト低減、農業労働力支援、事業承継、IoTを取り入れた営農管理システム（ZIGIS）などを紹介、解説しています。

この一冊があれば、全農全体を丸ごと理解できる、そんな冊子を目指して作成された「全農リポート2018」。関係先の他、全農役職員全員に配られますので、ぜひ積極的にご活用ください。ホームページの電子版もダウンロードできます。

動画で見る
県本部の
取り組みはこちら



電子版は
こちら



全農リポート2018の表紙は畜産物を重点的に配置。左上にゼウくん、みの太も登場！共同購入トラクターもあります



長澤会長・神出理事長のトップメッセージ

【全農リポート2018の内容】

ページ	
4	トップメッセージ
6	日本、そして世界の協同組合
10	海外ネットワークと産地多元化
12	情勢編
18	平成30年度 事業計画のあらまし
20	自己改革 展開と現況
26	他企業との取り組み
28	トータル生産コスト低減の取り組み
30	事業紹介
44	労働力支援の取り組み
45	営農支援の取り組み
46	技術開発の最前線
49	災害からの復旧・復興に向けた取り組み
50	デジタルイノベーション
52	県本部の取り組み
57	広報活動
58	社会貢献活動
62	全国のお店
64	資料編

インタビュー

全農技術顧問、京都大学名誉教授

堀江武氏

アジアを支える水田農業のこれから

京都大学名誉教授で全農の技術顧問を務める堀江武氏は今年6月、「アジア稲作に及ぼす地球温暖化の影響に関するシステム農学的研究」で日本学士院賞を受賞しました。農業気象、稲作の研究に永く携わってきた堀江氏に、地球温暖化による今後の稲作や日本農業の進むべき道について伺いました。

【広報部】



島根県安来市の農家に生まれ、5人兄弟の末っ子で兄や姉とは年が離れていました。小学生の時に兄がなくなり、年の離れたすぐ上の姉が婿を迎え、家業を継ぎました。身を立てるためにと頑張って勉強し、京都大学農学部に入り、卒業後、農林省の研究所に就職しました。農家を継ぐことがなかった私が、稲に関係する研究に永年携わってきたのは、朝早くから働いていた両親の姿を見てきたからだと思っています。

優れたシステムの 日本の水田農業

これまで世界各国から講演を頼まれて出掛けてきましたが、半分は途上国です。インドやタイ、ラオスなどの農村は、地球温暖化があるうがなからうが、



タイ東北部の天水水田での田植え

をしなくてもできる稲作はないかと、この分野の研究に入りました。

現地の農村は、焼き畑とか深水の水田という地域がいくつもありました。深水というところも3メートルも水がたまるんですよ。それを見ると日本の水田が、いかに優れたシステムかということが分かります。これまでの農業は粗放ですが、それで食べていける時代は良かったのでしょう。

非常に大変な所です。貧困だし農業生産性が低く、不安定で。村の様子は私が育った昭和20年代の日本と重なって見えませんでした。

食料が足りない、農業がうまくいっていないことが大きな問題です。例えば焼き畑をみると、どんどん山奥に入って焼いてしまっています。環境問題とリンクしています。山を焼くなどいうことでは済まないんです。生きるためですから。そんな無理

う。しかし、人口が増え、しかも商品経済が入ってくると、安定して高い生産性を維持できる水田農業の確立こそ、目指すべきゴールです。水田農業は持続的で200年も、300年も持つんです。欧州の畑作で麦を作ると、輪作で回すために2倍も3倍もの農地が必要です。水田だと狭い土地でもアジアの人たちを養えます。北ベトナムでは3反(30^ア)の水田で7・8人を養っていました。年に2回稲

を作って、間にトウモロコシとかナタネとかを入れます。種をまいてからでは間に合わないの、苗を育てて植えていました。野菜を作り、土手などの草を刈って牛に食わせ、残飯は小さな池で飼っている魚や豚の餌にして、それに米作り。すべて自給です。あれほど集約的な農業を見たことはありません。

こうしたことは水田農業だからできることです。水田は連作ができる、生産性が高く安定しているからです。アジア、アフリカの半分の田んぼは天水に頼っています。雨が降れば水浸し、乾けば干ばつです。水田の灌漑^{かんがい}稲作は、今まで人類が作り出した優れた生産システムといえます。世界の中で最も整備されているのが日本の水田です。水田の写真を比べると、高いところから撮った日本の水田は、あぜはありますがゴルフ場の芝を撮った感じになります。

アジアは水田抜きに発展はあり得ません。アジアの人口は44億人で、世界人口は76億人です。6割近くの人々がアジアに集中しているのは水田のおかげで、畑作では無理です。

日本学士院賞受賞

アジア稲作に及ぼす地球温暖化の影響に関するシステム農学的研究

アジアの基幹食料であるコメの生産に及ぼす地球温暖化の影響と適応策を明らかにする目的で、アジアの主要な稲作気候帯をカバーする水稲の品種・地域比較栽培ネットワーク試験、二酸化炭素を富化した温度傾斜型温室で水稲に対する二酸化炭素濃度と温度の複合的処理実験などによって得られたデータを解析し、大気環境が水稲の生育・収量に及ぼす影響を高い確度で予測する数理プロセスモ

デルの開発に成功。このモデルに、大気大循環モデルが予測する大気二酸化炭素濃度の倍増時の気候値を入力し、アジア各地域の水稲生産に及ぼす地球温暖化の潜在的影響を明らかにした。さらに、高二酸化炭素濃度・温暖化気候に高い適応性をもつ品種開発の目標形質とその遺伝資源を提示した。これらの研究成果はIPCC報告書などを通じて、温暖化防止の国際世論形成に貢献するとともに、内外のさまざまな研究機関で地球温暖化と食料問題の解決を目指す研究に活用されるなど、先導的役割を果たしてきた(日本学士院ホームページから)。

平場は大型水田輪作 中山間は個性出して

米の需要が減っている日本ですが、何があっても水田は残さなきゃいかんですよ。問題は水田の使い方です。水田だから稲を作るのが一番いいんですが、昔やっていた裏作の麦だとか、大豆だとか、場合によってはトウモロコシだとかね。平場では、いろんな作物を入れて輪作し、水田の機能を残していくのが一

つの方向です。

しかし、麦にしてもトウモロコシにしても単価が安いですから、大規模、機械化で徹底してコストを掛けない、米国の南部・アーカンソー州の稲作がモデルになると思いますよ。日本も大規模法人や大区画の水田ができています。米国並みとはいきませんが、それに近いものができると思います。しかし、水田を畑にすると地力が落ちます。中心は水田で、2、3年に1度は水田に戻すことが必要で

す。

もう一つは、水田だけでは成り立たないんですが、中山間地などでは付加価値の高い農業、例えば有機栽培とかで差別化していく方向です。結構高くてもいい物を買う層が結構おられるんですよ。6次産業化といわれていますが、加工食品とか、あるいは観光と結び付いた農業も考えられます。個性があり高くても買ってもらえる農産物生産とか、棚田ならその環境的価値を上乗せして売っていくとか。

ものすごく多様でどれをやったらいいいとはなかなか言えませんが、安全・安心に環境価値、プラスαの個性があつて、そういうものを生産者が提供し、それを消費者が大事に守っていくという姿ができないかなと思います。

稲の収量は伸びる 栽培モデル開発を

飼料向けなどで多収米が注目されていますが、私は多収でなくきゃいかと、前から言っています。昭和20年、30年ころは米をたくさん取ればもうかり、国



のためにもなると生産量アップに向けてあんなに日本中の農家が燃えた時代はありませんでした。あのころの古い品種です。『農林29号』とか『金南風』で、玄米ですが1ト(10⁴リ)当たり収量)取る農家がありました。栽培技術だけで今の倍を取っている農家がいたんですよ。多収品種も出てきていますが、栽培技術で収量を上げる余地があり、今の品種でも稲が望む環境ならば1トを取れる能力を持っています。

それが忘れられたのは、米余りで減反政策が続いたからです。収量アップのポイントは、栄

養と水管理の最適化です。稲が最も好む環境にする栽培モデルをきちんと作り、田んぼをモニターしながら適切な判断を下し管理することで収量増を実現できるでしょう。

地球温暖化で高温不稔 克服の技術開発が課題

日本学士院賞を受けたシステム農学的研究の中で、アジアの稲作が地球温暖化でどんな影響を受けるか、収量が増えるのか減るのかなどを研究してきました。稲に関しては世界の中でも早い段階から研究してきました

ほりえ・たけし 1942年、島根県安来市生まれ。65年、京都大学農学部卒。同年から農林省・農業技術研究所・物理統計部、84年から農水省・北陸農業試験場・環境部で農業気象の研究に従事。85年から京都大学農学部教授として作物学を担当。2006年に国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)理事長、14年から農研機構特別顧問、全農技術顧問、京都大学名誉教授、16年から全農技術顧問、京都大学名誉教授。

た。温暖化の原因は、二酸化炭素濃度です。光合成の原料ですから稲作にとってはいいことで、基本的には生産性を高める方向に働きます。ただ温度が上がりが過ぎると、今問題になっているのが白未熟粒という品質問題です。もつと温度が上がると不稔が出てきます。稲はそんなに高温を好む植物ではありません。出穂期に高温になると不稔になります。温暖化は、北の地方にとっては明らかにプラスですが、南は年によって不稔となり、生産が不安定になります。冷害と同じです。高温不稔を克服する技術開発が課題です。

J Aは農家から 頼られる存在に

農協は戦後、営農指導や信用事業などで農協がなければ、農家は食っていけない、生活が成り立たないということまで支えてきた存在です。この時代、人間関係もビジネスライクになってきていますが、成り立ちを大切に農家から信頼される存在であってほしいと思います。農村は画一的ではありません。地域、地域でいろいろな違いがあります。県の普及員は減ってきていますが、その中で、例えばICT(情報通信技術)を農家でも使えるようにしていくとか、パソコンを買ったがうまく使えないなどに対応できる、そうした頼れる存在が求められます。さらに、農家組合員と一緒にあって地域で新しい技術を作り、定着させる中心になってほしいです。農業はどんどん変わっていくわけですから、新しい農業を始めるためにもJ Aとその職員は、地域にあって頼れる組織、存在であってほしいと期待します。



自動飛行型ドローンで農薬散布

安定した飛行、均質散布に高い関心

来年度からの販売に向け各地で実演会

全農は平成29年10月、自動飛行型ドローンを開発製造する株式会社ナイルワークスに出資し、本所耕種総合対策部、肥料農薬部、生産資材部によるドローンプロジェクトを発足させ、来年度からの発売に向けて今年は実証試験を行っています。新潟県本部と山形県本部は農薬散布に合わせて実演会も行いました。

新潟県本部

新潟県本部は7月24日、長岡市の水田で自動飛行型ドローンによる農薬散布実演会を開きました。近隣の生産者やJA担当者、行政など約60人が参加しました。穂が出そろった水田で隅々まで均質に散布する様子を見て、飛行精度の高さと労力を大幅に軽減できる技術を実際に確認しました。

ナイルワークス社製ドローンは、GPSであらかじめ圃場の測量を行い、圃場の形や位置



自動飛行型ドローンの説明を聞く参加者

をタブレット端末に登録し、あとは、タブレット端末の開始ボタンを押すだけで、離陸から散布、着陸までを全て自動で行い

ます。薬剤散布は、飛行速度と薬剤量の設定に応じて噴出量を自動で調節し、また、上下逆回転のプロペラによる強い気流と圃場の上30〜50センチを飛行することで、ムラなく散布します。

当日は若干の風がありました。飛行は非常に安定し、およそ60坪の圃場を15分程度で散布し終えました。

参加者からは、「自動飛行によりオペレーターの負担が軽減できる点が良い」、「高度が低く、飛行は安定しており安心感があつた。薬剤が株元まで届きやすいので効果が期待できる」「価格はいくらぐらいになるのか」など、活発な意見、質問があり、自動飛行型ドローンに対する関心の高さがうかがえました。

【新潟県本部】

山形県本部

山形県本部は8月10日に酒田市、12、13日に尾花沢市で、自動飛行型ドローンを使い水稲の農薬散布実証試験を行いました。

実証試験は、自動飛行型ドローンの性能と農薬散布作業の実用性の確認を目的に、「山形県本部が取り組む農家手取りの最大化」を目指した「大規模営農モデル」のJAみちのく村山管内の農事組合法人魁（尾花沢市）、JA庄内みどり管内の農事組合法人ファーム北平田（酒田市）の合計15軒の水田に殺虫・殺菌剤を散布しました。演会には、地元の実産者やJA役職員ら約30人が参加し



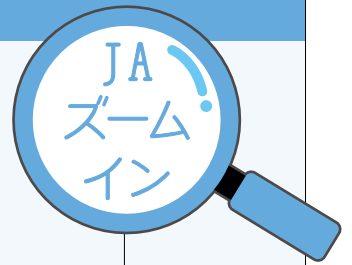
農薬散布状況を見守る生産者ら

ました。

収穫前にはドローンに搭載されたセンシング用カメラで圃場データを取得し、圃場別収量調査の実施を予定しています。山形県本部は、労働力不足への対応と生産コスト低減に向けたスマート農業の普及を目指します。

【山形県本部】





「農家の声」を反映し事業展開

加工用タマネギ導入し施設整備

JA茨城むつみ
(茨城県)



概要		平成30年1月31日現在
正組合員数		7571人
准組合員数		3220人
職員数		319人
販売品取扱高		76億2千万円
購買品取扱高		25億2千万円
貯金残高		1112億3千万円
長期共済保有高		3221億3千万円
おもな農畜産物		レタス、サニーレタス、ニガウリ、ニンジン、カボチャ、ネギ、トマト、キャベツ、ハクサイ、豚、バラ

JA茨城むつみは、首都圏から約50km圏内に位置し、生鮮野菜を中心に、農畜産物の重要な供給産地となっています。県の銘柄産地



集荷場に初出荷されたタマネギ

地指定を受けているレタス、サニーレタス、ニンジン、ニガウリその他、トマト、ネギ、ナス、キャベツ、カボチャ、ハクサイなど多くの品目を生産しています。

需要高く省力化できる加工用タマネギ産地化

JAでは、農家の声を運営に反映させようと、これまでJA正組合員を対象としたアンケート調査、農家や行政などを交えての意見交流会を行ってきました。この中で近年、JA管内の農業は1戸当たりの耕作面積が増加傾向であり、農地の有効活用や農業の効率化に期待する声が多く集まりました。そこで、種まきや収穫作



タマネギ定植機で実演会

業を機械化により省力化でき、国内産の需要が高まっている加工用タマネギに着目。加工向けの契約販売により経営安定を見込め、農業者の所得増大を図る品目と位置付け、産地化を進めています。

昨年6月から希望者を募り、栽培講習会や現地研修

会を開き、肥料、農薬の適正使用などと呼び掛け、安全・安心で良品質なタマネギの栽培に努めています。種まきや定植、収穫に使う機械は、要望の多かったリース事業を採用し、収穫を行いました。今年は昨年の反省点を生かし、一人一人の他品目の作付け体制や土壌の状況などに合わせた営農指導体制を整え、増収を目指します。

米、麦の品質管理センターも新設

意見交流会では、老朽化の進んだ農業倉庫の建て直しを要望する声も多数出ていました。そこで、新しく低温倉庫と乾燥調製施設を整備し、生産者の利便性を

向上させようと、管内の境町に品質管理センターの建設を進めています。

新たに建設する品質管理センターでは、主に米の貯蔵、検査を行い、麦の乾燥、調製も行う予定で、管内全地区の生産者を対象に2018年度中の完成、稼働を目指しています。



タマネギ収穫機械の実演も

県本部 だより

岩手県本部



「純情産地いわて」30周年 感謝祭で農畜産物の魅力発信

岩手県農業のさらなる発展に弾み

岩手県本部は8月11日、盛岡駅前で「JAいわてグループ presents 純情産地いわて30周年感謝祭」を開きました。県産農畜産物の「振る舞い」と「販売」を通じて、県内消費者、

帰省客、観光客に、「純情産地いわて」の魅力を品目横断的にPRしました。イベント開催当日は、帰省ラッシュのピーク。多くのお客さまに足を運んでいただき、イベントは大いに盛り上がりしました。

全国にPRするために
名付けたブランド名



お客さまの長い列ができた各ブース

「純情産地いわて」は、県産農畜産物の優れた品質を全国に広くPRするために名付けたブランドのこと。『純朴』な生産者が『情』を込めて農畜産物を作っている産地」と定義しています。平成元年から30年にわたって「純情産地いわて」のキャッチフレーズで消費宣伝・広報活動を行い、岩手県産農畜産物のイメージ

2018いわて純情むすめが「純情体操」を初公開



アップや消費拡大を図ってきました。今年度は、「純情産地いわて」を掲げて30周年。県内の生産者、JA関係者、取引先および関係機関の皆さま、そして、消費者に感謝の気持ちを伝えるために、6月1日に「躍

進大会」、そして今回「30周年感謝祭」を開催しました。

来場者の長い列ができた
「販売」や「振る舞い」

イベント開催に先立ち、JA岩手県五連の久保憲雄会長が主催者あいさつ。『純情産地いわて』を掲げて30周年を迎え、より一層地域と全国から愛されるブランドとなるよう取り組んでまいります」と「純情産地いわて」のさらなる発展を誓いました。

6時間にわたって、さまざまな販売や振る舞い、ステージイベントを実施。いわて牛・いわて純情豚の振る舞いには、長い列ができた家族連れが焼きたての肉に舌鼓を打ちました。また、当日は30度を超える暑さとなりましたが、来場者は、いわて純情野菜が割りきゅうりの試食や奥中山高原乳業(株)販売ブースのアイスクリームなどで涼をとりました。その他、いわての牛乳やいわて純情米の振る舞い、6次産業化商品の

販売など、「純情産地いわて」の魅力をPRしました。2018いわて純情むすめも参加。NHK「おかあさんといっしょ」4代目ダンスのお姉さんの「いとうまゆ」さんとコラボし、「純情体操」を初披露しました。岩手県本部は、今後とも、岩手県農業のさらなる発展に向けて、生産者、JA関係者や取引先の皆さまと一丸となり取り組んでいきます。



「純情産地いわて30周年感謝祭」に参加したスタッフ

[青 果 情 勢]

(園芸部)



野 菜



果 実

夏秋産地からの出荷最盛期

概況

9月は、前月に続いて北海道・東北・高冷地などからの出荷のほか、果菜類は関東産地の抑制物の出荷も増えてきます。

キャベツは、群馬の高冷地や岩手・長野などが中心の出荷となります。群馬・長野は適度な降雨もあり順調な生育で、昨年をやや上回る出荷となるでしょう。一方で岩手は定植期の高湿と干ばつから今後の生育が懸念されます。出荷量は前年並みを見込みます。

ハクサイは、長野などが中心の出荷となります。干ばつの被害が多少残ってはいるものの、生育はおおむね順調となっています。大きな天候の崩れなどがなければ、順調な出荷が見込まれます。出荷量は、前年並みを見込んでいます。

ダイコンは、北海道・青森などが中心の出荷となります。北海道は、種まきできていない時期があり、一時的に出荷ペースが停滞する圃場(ほじょう)もあるでしょう。出荷量は前年をやや下回る見込みです。

ニンジン、北海道・青森などが中心の出荷になります。各産地の出荷が出そろいますが、全体的に天候不順の影響から細物の比率は高くなるでしょう。出荷量は、豊作だった前年を下回る見込みです。

レタスは、長野・群馬の高冷地が中心の出荷となります。他の葉物野菜と同様、順調な出荷が見込まれます。出荷量は、豊作であった前年並みを見込みます。

トマトは、北海道・東北産地が中心の出荷となります。北海道・東北産地は花落ちした段が抜けるものの、気温の低下から小玉傾向となり、出荷量は前年を下回る見込みです。

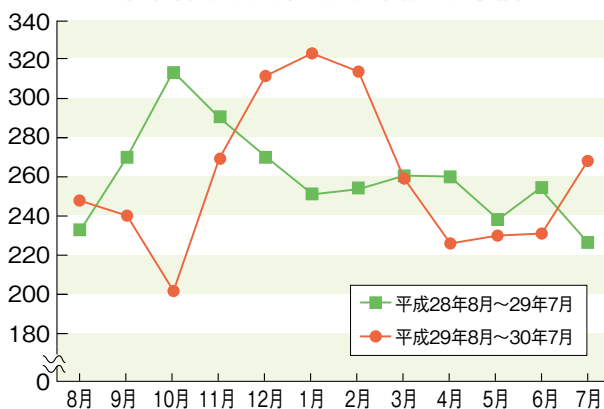
キュウリは、東北の露地物から関東の抑制物に徐々に切り替わります。東北産地は出荷量減少となりますが、関東産地からの出荷は増加となります。出荷量は前年並みを見込みます。

タマネギは、北海道からの出荷が始まります。出荷量は天候不順から前年を下回る見込みです。

店頭

9月に入ると、秋の味覚である芋類や、きのこ類などを使ったメニューや、一足早い鍋物メニューの企画も出てきます。また、9月は十五夜、敬老の日、彼岸などの歳時や、運動会や秋祭りなどの行事が催されますので、行事や行楽シーンに合わせた売り場作り・販促が実施されます。

円/㎏ 東京都中央卸売市場 国産野菜価格



秋の味覚が勢ぞろい

概況

9月は、夏果実のスイカや桃は出荷の終盤にさしかかりますが、果実全体で見ると、露地物を中心に華やかな季節となります。

ブドウ類は、長野・山梨・岡山などが中心の出荷となります。各産地とも生育が前進傾向で、山梨は8月の出荷量が多くなり9月はやや少なくなる見込みです。長野・岡山も上旬の出荷量が例年より多くなり、下旬には減少に転じる見込みです。やや小房傾向ですが、出荷量はおおむね前年並みを見込みます。

梨は、前年より約10日程度早い出荷ペースとなっており、「幸水」の出荷は8月でほぼ終了となりました。9月は栃木・茨城・千葉などを中心とする「豊水」、「あきづき」のピークとなる見込みです。出荷量は前年をやや下回る見込みです。

リンゴ類は、長野・山形などに加え、青森産の早生リンゴの出荷も開始されます。生育は前進傾向で出荷量はおおむね前年並みとなる見込みです。

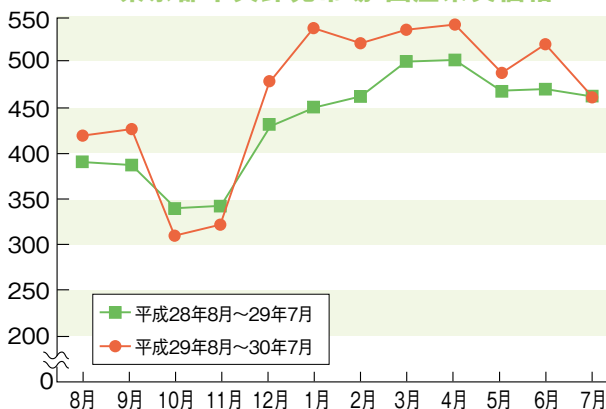
ミカン類は、宮崎・熊本などが中心の出荷となります。適度な降雨で玉肥大も順調となっており、出荷量は前年をやや上回る見込みです。

柿類は、和歌山・奈良などが中心の出荷となります。平年より早い生育となっており、やや小玉傾向となっていますが出荷量は前年をやや上回る見込みです。

店頭

9月の果物売り場では、ブドウ、梨、リンゴ、ミカン、柿、栗、イチジクなどの国産果実が一斉に出そろい、秋の味覚で彩られる華やかなシーズンとなります。

円/㎏ 東京都中央卸売市場 国産果実価格



主産県
だより

8月はレタス、梨、ピーマン、リンゴ、バレイショの主産県が一堂に会し、作況見通しや販売対策の共有化、消費拡大の進め方について協議しました。今後も主産県による情報交換会などを定期的に開催し、出荷情報や販売情報の共有を図ります。

東京・新宿駅近くのイベントスペースでJAの魅力をごPRしませんか

JA東京アグリパーク

来年度の申し込み10月1日スタート

東京都の新宿駅から徒歩4分にある「農業の情報発信拠点」で、地元の農業や特産品をPRしてみませんか? JA東京アグリパークでは、全国のJAなどが地元の農のPRイベントを開催しており、10月1からは2019年度の利用予約申し込みの受け付けを始めます。

【東京都本部】



新宿駅近くにあるJA東京アグリパーク

2017年4月にオープンしたJA東京アグリパークでは、週替わりで全国のJAなどの団体がイベントを開催し、さまざまな角度から農の情報を発信しています。原則、月曜に設営・準備を行い、火~土曜11:00~18:30にイベント開催となります。

イベント内容は、農産物や特産品の販売、地元の野菜などを使った軽食の提供、プランターからの収穫体験やセミナー開催などJAごとにさまざまで、調理スペースや冷蔵設備も完備し、多様なイベントの開催が可能です。これまでは、地域の行政や観光協会、商工会と連携したイベントもありました。都民、一般消費者が知らない新しい特産品や加工品など、販路拡大に

つながるイベントを開催してみませんか。

2017年度は年間23万5000人(1日平均900~1000人)のご来場があり、1週間の売り上げで320万円を超えるJAもありました。

詳細は、JA全農東京管理部企画総務課
(☎042-528-1334)または、
JA東京中央会広報部
(☎042-528-1372)まで。

【JA東京アグリパーク】

〒151-0053
東京都渋谷区代々木2-10-12
JA東京南新宿ビル1F
JR新宿駅南口から徒歩4分
利用料:1週間21万6000円
(税込み)



東京都本部と旬八青果店が開いたイベント



「食と農」の情報を広く消費者へ! スマホアプリを公開中

JA全農のイベントや新商品に関する最新情報がさらに充実!

作動環境: スマートフォン iOS8以上 Android4.3以上



JAタウン ショップ紹介

JAタウン |

検索
クリック

和歌山発!! ふるさとへの便り (JA和歌山県農)



和歌山のたねなし柿(2L 12玉).....3380円

JAタウンは
こちらから



柿の生産量日本一の産地和歌山県より、「たねなし柿」をお届けします。

「たねなし柿」はその名の通り種がないので食べやすく、ビタミンCが豊富で、優しい甘みとまろやかな口当たりが人気の柿です。

冷やしてそのまま食べるのもよし、サラダなどの料理に使うのもよし。和歌山県の生産者の方々が心を込めて作った「たねなし柿」をぜひ、この機会にご賞味ください。

柿アレンジレシピは
こちら



なお、ご紹介した商品は、9/21(金)まで、FAXでもご注文を承ります(ご自宅宛代金引換のみ)。※天候などによりご希望に沿えない場合があります。

【ご注文方法】①商品名、規格、数量②郵便番号③住所④氏名⑤電話番号⑥FAX番号をご記入のうえ、FAX番号03-5218-2517までご送信ください。商品代金の他、お届け先により送料がかかります。※10月中旬頃からの発送予定です。

JA全農のインターネット ▶ご注文は <http://www.ja-town.com>

ショッピングモール ▶お問い合わせは shop@ja-town1.com

※本誌を通じていただいた注文などで取得した個人情報、商品等の発送にのみ使用します。